

ケルト概念再考問題

原 聖

はじめに

2003年9月から10月にかけて、京大での欧州古代史に関するシンポジウム、阪大でのケルト学会議大会シンポジウムなど、立て続けにケルト概念を再考する催しが日本で開かれた。こうしたシンポジウムがどのような意味をもつか。ヨーロッパでの議論を踏まえつつ、少し検討してみることにしたい。

議論に入る前に、その前提として、わたしとケルトとのかかわりを若干述べておくことにしたい。わたしがケルトとのかかわりをもつことになったのは、大学院修士課程で、ブルターニュの两大戦間期の自治運動を扱ったところであり、それ以来、かれこれ20年以上が経過している。自治主義運動のなかで、ケルト的連帯とか、ケルト主義などという言い方があることを学び、ブルターニュ自治運動・民族運動にとってケルトという概念が大きな意味をもつことに興味をいだいた。その後、とりわけレンヌ大学のケルト学科に留学して、ケルトにさらに親しむことになった。研究生生活の点からも、この期間はわたしにとってたいへんインパクトが大きかったが、これ以降、ウェールズでカムリー語を学び、アイルランドやスコットランドでもそれぞれ地元の「ケルト語」を学んだので、ケルトの世界にいまでもどっぷりつきこんでいるといってもいい。

レンヌ大学ケルト学科は、ブルターニュの地元の言語、ブレイス語をはじめとして、ケルト諸語を学び、関連するケルト文化を研究するところである。ケルトを学科名にもつ大学はそれほど多くはない。いずれもケルト諸語の学習と結びついており、学問世界では、何よりもまず、ケルトが言語学的名称だということがわかる。しかし、自治運動のなかにケルト的連帯という言い方があるように、言語に限らない用法も存在する。また、ブルターニュでは、ブルターニュ独自の文化的伝統をケルト

的と表現する場合がある。このように、わたし個人の経験に照らし合わせてみても、ケルト概念は一様ではない。

本稿では、まずケルト概念の歴史の変遷を概観し、そのあとで近年のケルト・ブームを検証して、最後にケルト概念再考の論点をまとめてみることにする。

1. ヨーロッパ史のなかでのケルト概念

1) ガリアとケルト

拙著『民族起源の精神史』（岩波書店、2003年）で、これについて詳述したところだが、関係するところをピックアップしておこう¹⁾。

ケルト人は、カエサルの『ガリア戦記』にも登場するように、古代ヨーロッパにおいて使われていた。しかし当のケルト人がほとんど文字を使用しなかったので、ケルトは、自称としては確認されておらず（カエサルの『ガリア戦記』では、自分たちをケルトと呼んでいるという表現もあるが、これも伝聞である）、他称・呼称として用例がみられるだけだ。したがって正確には、伝聞としてケルト人と呼ばれる人びとが紀元前後のヨーロッパに存在したということになる。以降、中世初期にはケルトという呼称はまったく登場しない。民族名として忘れ去られていたということができる。

これが中世末期になって再登場することになるが、初期はガリアに付随して語られた。いずれにしても15世紀までは一般的とはいえない。セビーリアのイシドール（560ころ-636年）の『語源学』の記述や、13世紀のバルデルミーの『事物特性論』、14世紀はじめのベルナール・ギー『ガリア描写』などによって、地理的概念としての「ガリア」は知られていたが、その歴史についての知見はほぼ皆無だった。ネンニウス（『ブリトン人史』800年ころ）やジェフリ・オヴ・モンマス（『ブリタニア列王史』12世紀）でも、ガリアは地域として描かれ、カエサルによる「ガリア」の征服も記述されるが、いずれもほんの数行にすぎず、具体的な描写のないことはその証といっていいたろう。

『ガリア戦記』のもっとも早いフランス語訳は、1213-14年ころ成立したとされる訳者不明の『ローマ人記』の後半部に収録されるものだという。14世紀なかばに、プレルがカエサルの「覚書」の主要部を訳した。

15世紀末には仏訳本がいくつか付け加わり、『ガリア戦記』と呼ばれるようになって、フランスで一般的に普及することになった。

ケルトに関して重要なのは、アンニウス（1432-1502年）の『古代史』（1498年）である。ここで大洪水以来の系図が示されるのだが、ガリア人につながる王様の系譜がはじめて示された。このなかにケルト人の系図が登場する。「〔バビロニアの王サトゥルノの治世〕20年目、ユバルがケルト・イベリアを開き、やや遅れて、ディスとも呼ばれるサモテスがケルトの移住地を作った」（同「第5の書」）。ディスのサモテスの子からケルトの諸王に続く系図がはじまるのであり、マグス、サロン、その子のドルイウス、バルドゥス、ロンゴ、若王バルドゥスと続いていく。ピカール（生没年不明）の『古代ケルト学について』（1556年）も重要であり、「ケルト」が題名に登場するこの時代最初の文献といってもいい。

ポステル（1510-81年）の『ガリアの弁明』（1552年）は、この時代の「ケルト」起源論についてのもっともまとまった著作と評価される。起源の古さがフランスの優越性を歴史的に証明し、これを政治的に利用する戦略があった。「世界の最初の民族の名、それはガリア人である」（『新世界の女性の驚くべき勝利』1553年）。すなわち、大洪水の後、まっさきに生まれたのはガリア人だというのがかれの主張である。そして、ノアの子、ヤフェトの長子にはゴメル（ゴメルス）の名が与えられる。アンニウスなどのようにもはやサモテスではなく、聖書のゴメルであることは重要である。ゴメルこそ「ガリア人の父であり、創造者であり」、ここに「ゴメル神話」が誕生することになる。

ガリアが「大洪水」後の最初の、すなわち人類の始原にたつ民族だという議論が、フランスでは国の威信の高揚に合わせて積極的に打ちだされるなかで、「ドルイド」の実像にせまる記述が登場するようになる。ドルイドについては、15世紀以前でも西欧で知られてはいたが、本格的な議論は、やはりガリアが思潮のキーワードとして認識される16世紀以降になる。カエサルばかりでなく、プリニウスの『自然誌』（1世紀、全37巻）が知られるようになり、儀礼をつかさどり、共同体の長として威厳をもっていた、古代ガリアのドルイド像が語られはじめる。

16世紀において、民族起源を論じる際に言語と民族との同一関係に着目して、言語系統論として民族起源論が展開されはじめたが、17世

紀になると、こうした議論がさらにさかんになる。このなかで重要度を帯びるのが、スキタイ人起源論である。これがケルト語とゲルマン語との同族説の考え方にもつながっていく。

これについてはたとえば、シュリーク（1560-1621年）『ケルトならびにベルギーの事物起源』（1615年）、ドイツの地理・歴史家クルヴェリウス（1580-1622（23）年）『古代ゲルマニア』（1616年）、スウェーデン人のイエーガー（生没年不明）『欧州最古の言語、ケルト・スキタイ語とゴート語について』（1686年）、オランダの学者ボクスホルニウス（1602-53年）『ガリアの起源についての書』（1654年）、ライプニッツ（1646-1716年）『人の了解についての新試論』（1695年ころ、出版は1765年）があげられる。

イタリアのスカリゲル（1540-1609年）『遺稿集』（1610年、パリ）のなかに、「ヨーロッパの諸言語について」という論文（1599年執筆）がある。このなかでかれは、欧州の諸言語を4つの大語派と7つの小語派、あわせて11のグループに区分けした。エイレ（アイルランド）語とアルバ（スコットランド・ゲール）語を1下位語派、カムリー語とブレイス語（それぞれブリタニア語とガリア語と表現される）をもうひとつの下位語派に分類した。島のケルト系言語を2派に分けて記述したのはかれがはじめてだった。さらにこの分類はゲルマン諸語とケルト諸語とをはっきりと分けて考える最初の論考だった。もちろんこれは17世紀の論者にとっては例外的であり、19世紀になって比較言語学が体系化する過程で本格的に展開されることになる。

18世紀のヨーロッパ、とりわけフランスで「ケルトマニア」と呼ばれた人びとがある。「マニア」とは「熱愛」「偏執狂」であり、「ケルトマニア」とは、ケルトに執拗にこだわる人びとという軽蔑のニュアンスを込めて用いられた。19世紀の歴史家ミシュレが最初に用いたともいわれるが、1830年代の造語である。

ペズロン（1639（40）-1706年）は、ケルト語こそ人類始原の言語だと提唱し、それゆえに最初のケルトマニアと目される。1703年に発表した『ケルト人、またの名ガリア人の民族と言語の古き時代』で次のように述べた。「わたしはひとつのことを結論づけたい。すなわちこれこそ人が知らなくてはならないことなのだが、古代ガリアの言語であるティタン〔タイタン〕人の言語が、4000年以上の月日を経て、今日にま

で生きのびたのである。驚くべきことに、これほど古い言語が、フランスではアルモリカと呼ばれる小ブリタニア〔ブルターニュ〕の民であるブリトン人と、海の向こうの大ブリタニアの一地方、ガルの国の民、すなわちアングルテール〔イングランド〕のガリア人〔ガロア、ウェールズ人〕によって今もなお話されている」（フランス語原版から）

ティタン人とは、ヤフェトの子ゴメルの子ゴメルの子ゴメルを始祖とするスキタイ人が、フリギアにわたってから名乗った名であるという。スキタイ人は、ネンニウスでもスコット人の始祖として登場し、中世を通じて知られていた。とくにドイツでは、15世紀には自民族の起源としてよく取りあげられるようになる。16世紀に始原語がさまざまな形で議論されるようになってその主張は勢いを増す。スキタイ語始原語説として、それを決定づけたのはすでに指摘したオランダのボクスホルニウスであり、ライプニッツであった。このスキタイ人とガリア・ケルト人との系統関係がペズロンで逆転していることがわかる。ガリア人の始祖ゴメルは、スキタイ人の始祖マゴグの兄であり、ガリアの方が優先権をもつと主張するのだ。ヤフェトの子ゴメルの言語は、ヘブライ語を直接引き継ぐケルト語だが、このヨーロッパの「原民族」の生き残り、その「純粋な」子孫がブレイス語であり、カムリー語なのだと明確に記すのは、かれがはじめてだった。ブリトン人こそヨーロッパ人の起源であり、聖書起源で説かれるように、それは人類全体の起源でもある、これを引き継ぐのが現在のブリトン人であるという、いわゆるケルトマニアの主張はここに生まれたのである。

2) ケルト諸語と比較言語学の成立

ガリアとケルトとの関係、とりわけブリテン島とアイルランド島の「島のケルト」との関係は、比較言語学が学問として成立する19世紀になってはじめて明確化する。18世紀はじめのルイド（1660-1709年）の研究（『ブリタニアの考古学』「第一巻言語地誌学」1707年）は孤立したものであり、この書が一般によく知られるようになるのは19世紀後半以降である。比較言語学の初期の代表的な研究者アーデルング（1732-1806年）は、主著『ミトリダテス、すなわち言語学大全』（1806-17年）で、ケルト語は欧州の諸言語、とりわけゲルマン語とは異なり、2派に分類されることを、ルイドに基づいて記述した。第1のグ

ループは、エイレ（アイルランド）語、アルバ（スコットランド・ゲール）語が属し、いわば純粹ケルト語である。第2のグループは、カムリー語、ケルノウ語、ブレイス語からなり、こちらはカエサル時代に大陸から渡ったので、ケルト語とゲルマン語とが混ざった混合集団とした。この理論は、フランスではその後流行することになる。

印欧諸言語の比較研究にケルト語をはじめてとり入れたのは、イギリスの人類学者プリチャード（1786-1848年）の『サンスクリット語、ギリシア語、ラテン語、チュートン諸語とケルト語諸方言との比較によって証明される、ケルト諸民族の東方起源』（1831年）である。ポップ（1791-1867年）が1838年に「ケルト諸語について」という論文をベルリン・アカデミー学術論叢に発表し、印欧語におけるその位置が一般に認められるようになる。しかし、比較言語学におけるケルト語の重要性が広く認知されるには、ケルト学の祖、ツォイス（1806-56年）の登場を待たなければならない。かれがラテン語で書いた『ケルト語文法』（1853年）は、ガリア語、古エイレ（アイルランド）語、古ブレイス語、中世カムリー語などを含み、その後のケルト諸語研究の必携書となった。

ガリア人の言語についても、ケルト語であって、フランス語とは関係がないということが一般的理解として定着したのは19世紀前半であり、その契機となったのは、ドイツの言語学者でロマン諸語言語学の創設者と目されるディーツ（1794-1876年）の研究である。

3) 考古学・人類学、そしてケルト学

考古学が学問として確立し、実証的な研究方法が定着しはじめると、先史時代全般を「ケルト」という範疇でひとくくりにするのではなく、時代区分が設定され、それに基づく呼び方が主流になる。石器、青銅器、鉄器の3時代区分を最初に提唱したのは、デンマークのヴェデル・シモンセンである（『最古の民族史』1813年）。

1840年代、考古学的な遺跡調査が、英独仏の研究者たちによって、あいついでおこなわれる。有名なハルシュタットの発掘が始まるのが1846年だが（1868年まで続く）、フランスでもっとも有名なのは、ブーシェ（1788-1868年）によって、1840年から46年にかけてアップヴィル近郊でおこなわれた発掘であり、これが『ケルト人および大洪水以前

の古代』（第1巻1849年）として発表される。

ドイツで、ケルト人とゲルマン人がはっきりと区別されて主張されるようになるのもこのころである（ブランデスによる『ケルト人とゲルマン人の民族学的関係』1857年）。

遺跡発掘の成果から人類学も学問として確立されはじめる。プロカ中樞（運動性言語中樞）の命名者プロカ（1824-80年）を中心として「パリ人類学会」が設立されたのが、1859年である。プロカは1872年に『人類学雑誌』を創刊し、1876年には人類学学校を設立する。かれは19世紀フランスでもっとも重要な人類学者だが、パリ人類学会のなかではケルト人の専門家だった。1872年、創刊されたばかりの『人類学雑誌』に「古代および現代のケルト人種」を発表して、かれの考えのあらましをまとめている。まずかれは考古学、言語学、頭蓋骨学それぞれでケルト人の考え方が違うことを述べ、19世紀前半のとりわけアメデ・ティエリ（1797-1873年）の言語と人種を同一視する考え方を批判する。1830年代に活躍したエドゥアール（1777-1842年）と同様、プロカもフランス人の起源をガリア人とみる。アルモリカ人も言語は「キムリス」（すなわち「カムリー語」、ブリトン語）が残っているかもしれないが、人種的にはほかのフランス人と同様「ケルト」人であると主張した。つまりブリテン島から移住はあったとしても、人種的構成を変えるほどではなかった、「ガリア」の人種はブルターニュでも残存した、という考え方である。

『ケルトとガリアの考古学』（1876年）、『ガリア人以前のガリア』（1891年）の2冊を刊行するベルトラン（1820-1902年）によれば、ケルト人は石器・青銅器時代の人びとであり、ガリア人は鉄器時代人である。つまり、両者の区別は人種的違いではなく、時代区分なのである。しかもこれによって、ガリア研究は古典古代の文献調査による歴史学の領域の仕事であり、ケルト研究が言語学や考古学その他に残された領域ということになった。

1870年、ケルト学の初の学術雑誌『ケルト雑誌』が創刊され、ケルト学・民俗学が学問として成立していく。考古学ではケルトの意義が相対化する時代だが、ヨーロッパ各地で学問として確立する民俗学や言語学では、ケルト研究はぎゅくに重要な位置を占めていく。ケルト諸語についての大学での講義は、ドイツでは1871-72年のライプチヒ大学での

ヴィンディッシュ（1844-1918年）によるものが最初だが、1878年には、ベルリン大学でツィマー（1851-1910年）による講義がはじまる。この大学では、その後1897年に『ケルト言語研究誌』が誕生し、ケルト学研究の中心地となっていく。

イギリスでは、ウェールズのアバリストゥウィス大学で1875年にケルト学講座が設立されるのが、その最初である。1877年にはオックスフォード大学で、ジョン・リース（1840-1915年）によるケルト語文学講座がはじまる。

フランスでは、民俗学研究とタイアップした形で、本格的なケルト学研究が開始される。パリでは1864年に『民族誌学雑誌』（6年で休刊）が生まれ、1872年には『人類学雑誌』が創刊されるが、国内の民俗学的事象に絞った研究は、ブルターニュ出身のセビヨ（1843-1918年）が設立する民間伝承学会が最初とっていいだろう（1886年）。

1882年、コレージュ・ド・フランスにケルト語文学の講座が誕生する。ブルターニュでもっとも権威のあるレンヌ大学では、1883年にケルト語の講義がはじまった（正式に講座が設立されるのは1903年）。また1886年に『ブルターニュ年報』が創刊され、以後、ブルターニュ研究の中核的位置を占めることになる。

20世紀はじめ、ドイツではベルリンをはじめ5大学、フランスではパリのコレージュ・ド・フランスほか4大学、イギリスではオックスフォードほか10大学（アイルランドを含む）、その他アメリカ、デンマーク、オーストリア、ノルウェー、スイス、スウェーデンなどでケルト学（言語学・文学）の講座が開かれるか、ケルト諸語が教えられていた。おそらくこの時期がヨーロッパにおけるケルト研究の最盛期だった。

両大戦間期のケルト学は、その中心地のひとつがドイツだったため、人種主義の影響を大きく受けることになるが、この間の経緯については、ケルト学研究者のあいだでは蒸し返すべきでないタブーとして、長らくヴェールに包まれたままだった。

本格的な再検討にいたるには、戦後生まれの若い研究者たちの登場を待たねばならなかった。1998年3月、ベルリン大学でおこなわれた「国家社会主義期およびそれ以前のベルリン大学におけるケルト学」のシンポジウムがその最初の試みだろう。ここで明らかになったことは、ケルト学者たちの強い政治的かわりである。とりわけ1936年にケル

ト学講座の教授となったミュールハウゼン（1888-1956年）は、ナチ・イデオロギーの観点からゲルマン先史・ドイツ民俗学研究をおこなうナチ親衛隊「研究・教育振興会」である「祖先の遺産」（アーネン・エルベ）のメンバーだった。こうしたナチ・イデオロギーとの結合により、ベルリンの『ケルト言語研究雑誌』は戦後10年あまり休刊を余儀なくされる。

2. ケルト・ブームの諸相

フランスに関して、戦後のケルト・ブームを検証すると、たとえば戦後あらたに登場した「アステリックス」という漫画がある²⁾。1959年、ゴシニ（1926-77年）とユデルゾ（1927年-）の二人によって、かれらの創刊した雑誌『パイロット』に発表されたものだが、1961年には最初の単行本『ガリア人アステリックス』が刊行され、出版された30点の単行本の総部数は、10数カ国にのぼる世界各国版をあわせて、2億8000万部に達する。1989年には、パリの北部近郊に「アステリックス・パーク」がオープンし、こちらも「ユーロディズニー」をしのぐ入場者をもつという。アステリックスは、少々乱暴だが正義感に燃え、まさに昔のガリア人についての、19世紀以来の作られたイメージを体現している。フランスの国民的ヒーローであり、その意味ではフランスに回収された、ナショナリズムに奉仕するケルトである。現代のフランスにおけるケルト・ブームはこうした面も持っている。

この一方で、とりわけ1970年代以降、地域文化としてのケルト文化が脚光をあびることになる。欧州統合の進展により、国境の敷居が低くなることで、国家を構成する諸地域の自立の度合いがぎゅくに強まったのである。ケルト文化の地域、ブルターニュ地方では、それはとくに音楽文化に顕著にみられ、フランスのなかでの独自性の主張に大いに貢献し、それとともに言語的親縁性に基づくいわゆる「ケルト文化圏」の形成にもつながった。ケルト音楽ブームは、すでに1970年代に、「スティヴェル革命」といわれるほどの影響力をもったシンガー、アラン・スティヴェルの登場によってはじまっていた。1971年にはじまったロリアンの「インターケルティック・フェスティヴァル」は、ケルト文化圏諸地域、すなわちウェールズ、スコットランド、コーンウォール、アイル

ランド、マン島、それにスペインのガリシアとアストゥリアスが参加する音楽祭である。毎年 5000 人近くの音楽家が参加し、1990 年代になると 40 万人以上の観客を集めるという大祭に成長した。1996 年、この祭りの常連であるブルターニュのシンガー、「ダン・アル・ブラス」の CD「ケルトの遺産」がフランスで爆発的なヒットを記録した。これこそ現在のケルトのイメージの代表とっていいだろう。

このようにみえてくると、ケルト・ブームは、フランスでは 1970 年代に一度盛り上がり、90 年代になって再度さらに強まったとっていいだろう。90 年代の音楽ブームは、ケルト文化圏諸地域が共有する。アイルランドやスコットランドばかりでなく、コーンウォールやマン島、さらにはガリシア出身のアーティストたちが活躍をはじめた。その一方では、妖精物語などの幻想的文学、ケルズの書などのケルト文様などの流行がブームに拍車をかけた。70 年代には、一様化する近代文明に対する反抗、「違った形で暮らす」、たとえばヒッピー文化のような、アンダーグラウンドとかドロップアウトといった「68 年 5 月」の思想的基地のひとつとして、ケルト文化があった。80 年代には「相異への権利」(ジオルダン)として地域語を話す権利が定式化されたが、ケルト諸語はまさにそうした復権をめざす地域語の代表だった。90 年代ではグローバル化という、地球全体の「マクドナルド化」「アメリカ化」への対抗の拠点としても地域語・地域文化が重要視された。多言語・多文化がキーワードになり、そのなかでケルトは、ヨーロッパの「もうひとつの形」「違ったもの」として、さらには論理的・合理的な欧州文明のなかで、現代にまで孤高を保った「神秘的」で「不可解」で説明不可能な、「不可侵」な稀有な文化的砦として、再評価されることになった。また「癒しの文化」「ヒーリング・アート」としてもケルト文化が注目された。ヨーロッパでも日本でも事情は同じだった。もうひとつ付け加えれば、ヨーロッパ統合の象徴としてのケルトがある。1991 年、イタリアのヴェネチアで「ケルト、始原のヨーロッパ」と題する史上空前規模の大ケルト文化展が開催された。最初の「汎ヨーロッパ」文化としてのケルトは、欧州統合の象徴としても大いなる役割を果たすことになった。

3. ケルト概念の再考

1) ヨーロッパでの議論

こうしたなかで、ケルトに対する批判が現れる。あまりに注目されることが多くなって、それに対する反感もあつただろう。その先頭を切ったのは、考古学の領域だった。2002年に、英国の考古学雑誌『アンティクィティ』が「ケルト論争」の「総集編」を刊行したが³⁾、これによれば、1987年に『スコットランド考古学雑誌』に載った論文で⁴⁾、「鉄器時代研究が、19世紀的思考にどっぷり浸かった「ケルト人」に対する関心にハイジャックされた」と述べられたのが最初のような。19世紀的思考とは、言語と人種・民族を同一視する考え方であり、すでに見たように、19世紀前半の民俗学ではこれが主流だった。1990年代は、東西冷戦構造の崩壊による「民族紛争」再発の時代であり、言語と民族を同一視する考え方もあまり疑問視はされなかった。

ケルトの民族的一体性とか、ケルト的精神性といった見方に対する批判もまさにこの1987年にはじまったようだ。ニック・メリマンは、ケルトの「民族的」一体性・精神性に疑問を投げかけた。ケルトとは、古典古代（ギリシア・ローマ）の目から見た、ほかの諸民族に対する呼称にすぎず、外側からの総称なのであり、「集団としての一体感」があるはずがないと主張した⁵⁾。

論争の火をつけたのは、1989年に出版された美術史家メゴー夫妻による『ケルト美術、始原からケルズの書まで』だった。ケルトの独自の精神性が存在するがごとくの論調に対して、再び、「スコットランド考古学雑誌」で、「理論的に無知であり」、ケルトの定義もなにもなっていないと酷評されたのだ⁶⁾。この雑誌の発刊間隔が1991年以降延びてしまい（次号は1995年だった）、ケンブリッジの『アンティクィティ』誌に論争の舞台が回ってくるようになった。1992年、書評に対するメゴー夫妻の反論が、この雑誌に掲載される。「ケンブリッジで研鑽を積んだ少数の集団が、ケルトのようなものは存在しないという、新しい通説を広めている」と主張し、自らはケルト民族を肯定する立場だと断った上で、現在のものであれ過去のものであれ、他の民族の存在を否定するのは、「民族浄化」の思想に匹敵するとまで言い放った⁷⁾。メゴー夫妻は、古典古代の文献に見られるケルトの「定義」と、現代の民族の定義

には、決して一様ではないが類似性があり、それに注目することも視点としては可能だといったのだが、これを真っ向から否定したのが、その後数年間にわたって論争相手となったジョン・コリスだった。かれは、「ケルト人」の存在を否定するわけではないが、しかしそれを、言語的にも居住地からも、また自己規定としても確認するわけにはいかない、したがって現在議論できるような民族とはいえない、まさに「神話」にすぎないと主張したのである⁸⁾。さらにラテーヌ文化とケルト人とを同一視することにも方法論的に問題だと指摘した。大陸ケルトについては、古典古代の作家たちがケルト人について語っているのは確かだが、一般的認識としては紀元前1世紀になって、ケルト人の存在が確認されたにすぎないという見解も登場してくる⁹⁾。

コリスの立場をブリテン島のケルトに関して援護することになったのが、サイモン・ジェームズの『アトランティック・ケルト』¹⁰⁾であり、ケルトを英国の鉄器時代に用いることは方法論的に誤りであり、無意味であると主張することになる。このあたりの事情については、田中美穂「島のケルト」再考¹¹⁾に詳しいので、それに譲ることにする。考古学の現状を総括すると、ケルトをめくっては4つの立場があり、一つ目は、ケルトを他者の側からの定義とする、古典古代の側の構築物と考えるもの、二つ目は、ケルトを民族(エスニシティ)と考え、その定義に際して、文化的相異の状況的特殊性という現在のエスニシティ定義を援用するもの、三つ目は、旧来のケルト文化の枠組みを踏襲するもの(美術史のメゴー夫妻のような立場)、四つ目は、若手を中心としたケルト概念をまったく無用と考えるものに大別されるようだ。

わたし自身は、1997年に一年間、パリに滞在してケルト学研究をやり直した経験があるが、そのときには実はこうした情報に接する機会がなかった。その翌年から多少情報が入るようになり、1999年になって積極的に収集するようになった。1999年というのは実に象徴的である。スコットランドとウェールズの自治議会の発足がまさにこの年であり、ブリテン島におけるケルト人否定論というジェームズの主張は、民族的多様性を否定するイングランド民族主義者の抵抗と取られて¹²⁾、政治的論争にもなった。

この年7月、アイルランドのコークで4年に一度の国際ケルト学大会(第11回大会)が開かれたが、ここでも論争が展開された¹³⁾。実はその

前の大会、1995年のエジンバラでの第10回大会で、「反ケルト的」な考古学者が話題となったが、反論する機会が与えられず、4年後のヨークで再度議論することをコリスの側から提案したようだ。わたしは、エジンバラ大会にも出席していたが、当時そうした問題に対する認識がなかったせい、見逃していた。コリスが提案したセッションは、「ケルト性」Celticityをめぐるもので、ケルト学の大御所であるブローシャス・マッカナの司会の下、ジョン・コリスほか、バリー・ラフテリー、パトリック・シムズ＝ウィリアムズといった、ケルト学者のなかでもメゴ夫妻に比べれば冷静な人々が議論を戦わせた。まずコリスがこれまでの「ケルト懐疑派」の議論を総括した。興味深かったのは、60年代から70年代についての議論である。60年代は、侵略・進入により文化がもたらされるという議論が主流で、それは植民地主義の議論を反映するものでもあった。1973年以降、かれはフランスのオーベルニュでの発掘に携わったが、この時代に、鉄器時代におけるフランス中西部の「ケルト化」について議論されはじめたという。それまでは鉄器時代とケルト文化とは同一視されていたのであり、それが疑問視されるようになり、これがハルシュタットやラテーヌとケルト文化とを同一視しない議論につながったのだ。こうした新しい考古学では、国際化のプロセスを単に人の移動だけで説明しない、さまざまな可能性を考慮することになった。これが大陸からブリテン島への移住を否定するという最近の考古学的傾向につながったという。これに対して、アイルランドの考古学の専門家ラフテリーは、ケルトが多民族的集団であることを確認することからはじめ、ヨークシャー出土の馬車が当初は紀元前の進入の証拠と見られていたのが、いまではブリテン島独自のものであり、またアイルランドのいわゆる末期ラテーヌ文化が進入の証拠になるわけではないことから、人の移動なしの文化の類似性・移転の可能性に言及した。ないしはこうしたところまでを含めたケルトの多様性をどうみるか、と考えることになる。ケルト文化をさらに広義に考えることにより、ケルト概念を維持しようとする立場である。シムズ＝ウィリアムズは地名などをみても言語学的にケルトは、多様性をもつ一体的なものとして確認できるともいえるが、昨今の議論から意義を引き出すとすれば、ケルト性の点検がその多文化的意義を確認することにつながるという。両者とも、ケルトの概念的有用性を否定しないという点では、コリスと立

場を異にする。会場からはメゴーの発言もあったが、議論としてはかみ合うようなものにはならなかった。ケルト学研究という場所で、ケルト概念その自体の意義を問うという、これまでは考えられなかったことがおこなわれたということが評価されるべきことであろう。

ちなみに、4年後の2003年8月、ウェールズのアベリストウイスで、ケルト学の第12回大会が開催されたが、ここではこうした議論はすでにほとんど話題にならなかった。わたしが確認した限りでは、ケルト懐疑論の言説的な分析が一点あっただけだった。

2) 日本での議論

2003年9月20日、京都大学で「古代世界における物質文化、意識、そして歴史的アイデンティティ ケルト人、ギリシア人とローマ人そして近代ヨーロッパ人の理解のために」と題するシンポジウムがおこなわれた。ここでは「ケルト人とガリア人」というセッションが設けられ、ケルトの歴史的概念としての有用性を考える疋田隆康「ケルト人とガリア人」、『アンティクィティからのケルト人』の編者の一人であるギリアン・カー「ケルト人の殺害、パラダイムの創作」の2報告と南川高志によるコメントがおこなわれた。議事報告が発行されるので、ここでは、その内容にまでは言及しない。疋田は、ケルトとガリアの概念としての使われ方の歴史を概略した。カーは、コリスの議論を紹介した。重要な点は、カーが歴史的（操作）概念として、少なくともブリテン島については、ケルトは必要でない、かえって邪魔になると主張したことである。おそらく今後は、英国古代史の記述において、「ケルト文化」という言い方は登場しなくなることだろう。

同年10月11日 - 12日、大阪市立大で第23回日本ケルト学会議が開催された。この学会は、ケルト諸語の研究を中心に歴史、文化、文学を含めた多様な学問的背景をもつ日本の研究者の団体であり、すでに30年以上の研究実績がある。ここで、「島のケルト」概念を問う」と題する討論会をわたしの司会で開催することになった（12日の午後）。4年前のヨークでの議論を、場所を日本に移しておこなうようなものである。前日に、松本達郎「ケルト」の定義に関する若干の提言」という、日本のケルト研究者のなかでは、標準的な（欧州では伝統的な）ケルト理解の講演がおこなわれ、それを踏まえ、むしろ問い直しの側面を

重視して、議論が展開された¹⁴⁾。

田中美穂は、「「島のケルト」再考、ブリテン諸島史の可能性を探って」と題して、『史学雑誌』での議論を紹介した。前近代のブリテン諸島史に関する限り、ケルトという概念はまったく無用という主張は変わりがないが、さらに一步踏み込んで、ケルト諸語という考え方も言語学者の理論上の再現にすぎず、概念として必要ないのではないかと提起した。インド・ヨーロッパ語族という概念もケルト語派という概念も言語学者の恣意的な用語に他ならないが、第1節でみたように、この枠組み自体の形成がすでに長い歴史をもっており、歴史言語学者にとってこれを問い直すのは、学問的な根拠の否定にもつながりかねず、おそらく不可能だろう。

辺見葉子「「島のケルト」、言語・文学研究の見地から」は、ケンブリッジのケルト学研究的伝統のなかでの、近年の「否定論」に対して、どう応答しているかを中心として、ケルト文学研究者の立場を紹介した。世界観とか心情とか、感性的領域で「ケルト」の果たす役割は、依然として強力であることを確認したうえで、現代世界で「ケルト」アイデンティティを主張する人々がいて、それを過去に投影する人々がいる、文学研究ではまさにこうしたレベルでの捉え方で十分なのであり、実体としてケルトを問題とする必要はないという考え方である。そのうえで、従来のケルト民族・文化のような捉え方は修正していく必要がある。それこそケルトの脱構築ということだろうと主張する。

南川高志「「ケルト」論争と歴史学者の立場」では、英国の古典学者・考古学者のなかでの議論、2週間前の京大での議論を紹介するなかで、ケルト概念の虚構性を告発するより、常に批判と検証が必要な歴史的概念として相対化する必要があることを訴えた。古代において、また近代以降、それぞれのコンテクストで歴史的に用いられてきたことは確かであり、その用法を検証するほうが、無用と決めつけるより生産的だという主張である。

本稿第1節でも概述したように、ヨーロッパ史では、ケルト概念はいくつかの特徴的用法があるものの、国民国家とか民族主義といった歴史的に重要な概念と関係して、とりわけ近代以降用いられており、それをさらに分析することが、まさにケルト概念の脱構築につながり、集団的

アイデンティティとか、そのヨーロッパ的特殊性といった、もっと一般的なレベルでの議論にも貢献できるものとなるだろう。

注

- 1) 拙著『民族起源の精神史』岩波書店、2003年、第4章、第5章、第6章、第7章参照。
- 2) 以下、第2節については、前掲拙著、終章参照。
- 3) Cf.: Carr, Gillian and Stoddart, Simon (eds.), *Celts from Antiquity*, Cambridge, 2002.
- 4) Champion, T., The European Iron Age: assessing the state of the art, *Scottish Archaeological Review* 4 (2), 1987.
- 5) Merriman, N., Value and motivation in prehistory: the evidence for 'Celtic spirit', in I.R. Hodder (eds.), *The archaeology of contextual meanings*, Cambridge, Cambridge U.P., 1987.
- 6) Taylor, T., Celtic Art, *Scottish Archaeological Review*, 8, 1991.
- 7) Megaw, J.V.S.; M.R. Megaw, The Celts: the first Europeans?, *Antiquity*, 66, 1992.
- 8) Collis, John, Celtic myths, *Antiquity*, 71, 1997.
- 9) Wells, P., *Beyond Celts, Germans and Scythians*, London, Duckworth, 2001.
- 10) James, Simon, *The Atlantic Celts: Ancient people or modern invention?*, London, British Museum Press, 1999.
- 11) 『史学雑誌』111編10号(2002年)。
- 12) Barry Cunliffe, Con on the barbarian, *The Times Higher*, 4 June 1999.
- 13) ケルト学の3大会については、大会のプログラム、配布資料、大会当日の筆者のノートなどによる。エジンバラ、コークの大会については議事録が出版されているが、「ケルト懐疑論」に関する記述はない。
- 14) いずれ議事録にまとめられるはずである。

(女子美術大学教授)